

教養学部の教育活動と総合研究について

教養学部長 水谷 修

教養学部発足以来、教育の柱の一つとなっているのが、最終学年の必修科目「総合研究」である。教養学部では、卒業研究を総合研究とよんでいる。

<総合の意味>

「総合研究」の「総合」にはいくつもの意味がある。ひとつは、学生が複数の指導教員のもとで様々な専門分野を自ら総合しながら研究をすすめるという意味での総合である。次に、複数の学生が場合によっては学科をまたいでチームをつくり、集団で研究するという意味での総合である。もうひとつは、一人ひとりの学生が4年間の学生生活の集大成として卒業研究に取り組むという意味での総合である。教養学部が2005年に専攻制から学科制に改組され学科の独自性がより鮮明になったが、卒業研究には、学科横断的な自由が保障されている。教養学部は、文理融合型の、これまでにないユニークな学部として構想され存在してきているが、この基本理念を実現するのが総合研究であり、それが教養学部らしさである。

<総合研究の進め方>

教養学部の4年生は、テーマごとに組織された、複数の教員で構成されるチームに所属し、大学での学びの集大成として、複数の教員に指導を受けながら自らの力で一年間をかけて卒業論文の作成に取り組む。総合研究の進め方はチームに任されるが、どのチームにも共通に、「構想発表会」、「中間発表会」そして「成果報告会」を行うことが義務付けられており、学生はこれらの関門をクリアしながら論文を仕上げることになる。この卒業論文と格闘する時間は、学生一人ひとりが大きく成長する時間である。

<研究成果の表彰と公開>

2004年以降、教養学部では、優秀な論文を表彰する制度を設けてきた。この制度の目的は大きく二つある。ひとつは、卒業研究に真摯に取り組み成果を挙げた学生を表彰し、その努力を正当に評価しようというものである。ここには、卒業研究に向かう学生の動機付けを高めるねらいがあることは言うまでもない。もうひとつは、教養学部のアイデンティティーを確認し、教養学部の独自性はどこにあり、何を学ぶことができ、学生はどのような成果を挙げているのかを対外的にも宣伝できる形を残そうというものである。

この制度の運用は、次のようになっている。毎年、優秀卒業論文選考委員会を組織し、1月中旬に提出された卒業論文のなかから学際性の観点からみてもっとも教養学部らしい卒業論文に「学部長賞」が、それぞれの学科の専門性の観点から「学科長賞」が、優れた卒業論文に対して「優秀論文书」が与えられる。なお、各年度の学部長賞の受賞者と論文のテーマは別表（総合研究学部長賞受賞論文）の通りである。学科長賞と優秀論文賞については紙幅の関係で割愛する。

各賞の授与は卒業式当日に行われ、「学部長賞」を受賞した論文は、教養学部の紀要『東北学院大学 教養学部論集』に原則として掲載される。また、毎年3月初旬に、「学びのオープンキャンパス」と称して、優秀な論文の発表会が学外にも公開の形で開催される。これは、教養学部での4年間の学びの成果を広く理解してもらう機会になっている。

※本稿は、2011年2月9日開催の教養学部教授会資料「優秀卒業論文表彰制度と学部長賞選考の在り方について」をもとに作成した。



経歴

東京教育大学卒、筑波大学大学院満期退学。日本学術振興会奨励研究員、筑波大学助手を経て東北学院大学講師・助教授・教授、2016年4月より教養学部長併任。生涯学習論が専門で、著書に『地域をコーディネートする社会教育』（共著）などがある。社会的活動では、宮城県社会教育委員会議委員長として「地域をつくる子どもたち」などの意見書の取りまとめや、キャリア教育支援NPOの活動に参加。日本生涯教育学会会長賞、文部科学省社会教育功労者表彰を受賞。

<別表>

総合研究学部長賞受賞論文

回	年 度	氏 名	論文テーマ
1	2004（平成16）年度	小原 拓磨	曖昧な「自己」概念から、精神分析の「主体」へ
		角田あさ美	話しことばにおける無助詞について
2	2005（平成17）年度	花井 美香 南部まさみ 齋藤 良徳	PC 携帯電話対応型の健康支援システムの開発
		浅野 良輔	親密な対人関係の崩壊からの立ち直り～ sense of coherence (SOC) の重要性
3	2006（平成18）年度	鈴木 健人	J. コンスタブル研究～自然をめぐる同時代の文学および思想との関連を中心に～
		峰岸 正勝	数学科における電子黒板活用が児童の発表・説明に及ぼす影響について
4	2007（平成19）年度	根本 彩	不採用通知に見られるポライトネス・ストラテジー
		安齋恵美子	仙台市長町商店街の変遷と活性化への取り組み～商店街構成組織からまちづくり組織～
5	2008（平成20）年度	関内 理未	育児期の働く父親の仕事観・子供観～性役割観による比較～
		猪股 俊介	Double Chooz 実験で用いられる障害通知システムの開発
6	2009（平成21）年度	東 聖史	環境教育から ESD ～仙台市立中野小学校における事例研究と支援教材の作成～
		出羽 朋絵	高齢者の QOL 向上と見守りを目指したコミュニケーションの実証実験に向けた高齢者の行動解析
7	2010（平成22）年度	佐藤 航太 大内千春 高橋 智美	理想的なコミュニティを生み出す地域性と共同性の要件～宮城県名取市箱塚桜団地仮設住宅を事例に～
		堀籠 美佳	スポーツ少女にみるジェンダー～1970年代と2000年代のマンガ比較による～
8	2011（平成23）年度	湊 麻由佳	ABCD モデルの効果の検証～小学生を対象とした認知的介入～
		木村 実穂	Skype 通話を利用した外国語会話訓練システムの機能追加と教育効果の検証
9	2012（平成24）年度	菅井 冴織	神事化する地域イベント～山形県寒河江市の寒河江八幡宮例大祭と「神輿の祭典」を事例に～
10	2013（平成25）年度	徳田 菜美	グリム童話の「森」の2つの世界：異世界と日常の世界
		佐藤 勇貴	一般電話回線と Google ハングアウトを利用した外国語会話訓練システムの機能追加および運用
11	2014（平成26）年度	渡邊知香子	仙台市におけるオタク文化関連店舗の集積とその役割
		大崎 翔太	小学校高学年がプログラミングに興味を持つような教材の作成およびイベントの開催
12	2015（平成27）年度	村山 花奈	郊外住宅団地の高齢化・商業空洞化と「買い物弱者」解消の取り組み